概要

沖縄県は 1899 年のハワイ移民を端緒として多くの移民を送出しており、現在海外に約 40 万人の沖縄系移民が暮らしているが、1990 年より「世界のウチナーンチュ大会」と称して 5 年に一度、世界の沖縄系移民が集うフェスティバルを開催している。

筆者は沖縄在住時（2005-2009 年）に沖縄ニューカレドニア友好協会で事務局を担当し、沖縄からニューカレドニアへ渡った沖縄系移民子孫の支援を主とした沖縄とニューカレドニアの交流にかかわってきた。

本論文では、その活動から観察された沖縄の移民社会を中心とした国際交流のあり方について、ニューカレドニアの事例から論じる。

前提としては、沖縄における「移民」、ニューカレドニアにおける「日系移民および沖縄系移民」、そして沖縄における「国際交流」がある。

「移民」は近代日本の国家政策の一つであったが、沖縄県は送出移民数において全国で広島県に次いで２位と他県を圧倒していた。1899 年のハワイ移民が端緒であったが、初期移民はハワイ、フィリピン、メキシコ、ニューカレドニア、その後、米国排日法が実施されると、行き先が南米のブラジル、ペルー、アルゼンチンにシフトされた。第一次世界大戦が終わると旧南洋群島、第二次世界大戦前にはフィリピンに渡ったものが多かった。戦前は単身での移民が多かったのに対して、戦後は呼び寄せや家族での移民がみられたが、高度成長期に入ると、国内での労働力需要が高まったため、移民は収束した。

沖縄県においてなぜ送出移民数が多いのかというと、①人口過剰、②移民啓蒙家の出現、③共同体規制の崩壊、④社会組織、⑤徴兵忌避などが挙げられている。

日本からニューカレドニアに初めて移民が渡ったのは 1892 年だったが、沖縄からは 1905 年だった。第一次世界大戦による不況で契約移民が終了する 1919 年までに日本人 5581 人が同島へ渡り、そのうち 821 人が沖縄県出身だった。1930 年代には再び入島者数に若干変化がみられたが、

日仏合弁の鉱業会社などの設立によるものだった。

1941 年 12 月 8 日の日本軍による真珠湾攻撃をうけて、その翌日アメリカ合衆国が宣戦布告すると、ニューカレドニアの日本人は敵性外国人として一斉に逮捕された。

その当時いた日本人は 1140 人とされる。このように逮捕された日本人たちはオーストラリアの強制収容所へ送られることになり、終戦を迎えると日本へ強制送還となった。その後ニューカレドニアへ戻った日本人は非常に少なかった。このようにニューカレドニアの日系人社会は崩壊した。とり残された家族はフランス政府によって財産を没収された上、家を失った。父、祖父の消息がわからないままだったが、自らも検挙されるのを恐れて、彼らのことを語るのはタブーとされた。

ところが 1970 年代後半に先住民カナックの運動が自分たちの歴史を掘り起こす活動を始め、それが日系人社会に影響を与えて、日系人全体の歴史が再構成されることになったのだった。これが発展して、ニューカレドニアに残された家族が沖縄を訪ねることへのきっかけとなっていった。

さて、沖縄県は国際交流を沖縄振興開発計画の一つとして位置づけ、その中心に母県沖縄と世界各地の移民社会とのネットワーク形成を掲げている。「世界のウチナーンチュ大会」はその事業の一つで、沖縄県は海外の移民社会と連携をとっており、その組織は県人会とよばれ、これに対応する組織が沖縄県内にもある。筆者の活動する「沖縄ニューカレドニア友好協会もそれにあたる。海外移民社会との交流は県レベルにとどまらず、県内の市町村においてもみられ、海外で暮らす出身者を招聘して研修などしている。

世界のウチナーンチュ大会は 1990 年に始まった。5 年に一度のいわば海外県系人たちのホームカミングフェスティバルは 2011 年で 5 回目を迎えた。いきさつとしては沖縄メディアで 80 年代にスタートした「世界のウチナーンチュ」をとりあげた試みが県民意識を盛り上げ、新たな振興策を模索していた沖縄県政との意図が合致して開催へと至った。

筆者の調査期間（活動期間）は 2006 年 10 月 8 日～2011 年 10 月 16 日であるが、沖縄ニュー

カレドニア友好協会の活動は不定期で、主にニューカレドニアからの来訪者があったときや移民関連のイベント時であるため、本論文にあげた 27 の事例はそのほとんどが 2006 年の第 4 回世界のウチナーンチュ大会での参加者受け入れ、2007 年の訪問団受け入れ、2011 年第 5 回世界のウチナーンチュ大会での参加者受け入れ時のものである。

事例１～２７ではＡ、Ｂ、Ｃ、Ｅ、Ｆ、Ｇ、Ｈの７つの家族と、沖縄ニューカレドニア友好協会のメンバー、そして沖縄とニューカレドニアの二つの島の橋渡しを務めた人物が登場する。

事例から観察されるのは、移民者と沖縄の家族、地域、第三者との 3 つの関係性であり、それらが相互に関連しながら、連綿と母県沖縄と移民社会がつながっている様子がわかる。

そして、世界のウチナーンチュ大会も 1990 年の第１回大会から 2011 年第５回を迎えて、変遷しているのである。

まず、移民者と沖縄の家族の関係性では、ニューカレドニアの沖縄系移民子孫には世代間で差がみられる。２世には父親に棄てられたと思う一方で、父親を追慕する「相克」、３世には祖母、母などから聞いた祖父への「憧憬」、４世には沖縄に対する「好奇心」がみられた。

７つの家族はそれぞれ特徴も異なるが、ニューカレドニアの家族は消息不明だった父、祖父への積年の思いが叶った充足感が感じられる一方で、沖縄の家族、あるいは親戚は「ニューカレドニアの新たな家族」に喜びとともに困惑や葛藤が感じられる。家族関係が複雑な場合は一層深刻だった。「なにかしてやりたい」と思いながら、当事者だけでうまく意思疎通をはかることができない言葉の問題や物理的要因、心理的要因、経済的要因が考えられる。

さらに言えば、Ａ、Ｂ、Ｃ、Ｅ、Ｆ、Ｇ、Ｈのニューカレドニアの移民子孫に応対している沖縄の家族、または親戚は長男ではなかった。沖縄では長男は特別な存在であり、長男がニューカレドニアの親戚、あるいはもう一つの家族の世話をすることは、とても重要な意味を内包すると思われる。そのような理由から長男が積極的に応対することを忌避している可能性も捨象できない。全体的に世代間や血縁の遠近で意識の違いがみられた。

７人の家族同士の特徴としては、ＡとＢ、ＣとＥ、ＥとＦ、ＣとＦ、ＡとＨの５つの親戚関係

が見出せる。移民１世の出身地とニューカレドニアでの居住地をみてみると、同じ集落から移民地であるニューカレドニアへ渡り、その後も相互の人間関係を維持したといえる。

次に地域との関係性であるが、事例から移民者と出身字、そして移民者と市町村の関係が保たれていることがうかがえた。字とは行政の基本単位であるが、歴史からみると近代以前はムラ、シマと呼ばれていた。沖縄では門中という父系血縁集団が特徴的だが、家から構成されており、その門中がムラを構成している。近代以降は行政色が強まるなかで村落共同体としての性格を有し、住民の基本的生活単位であった。そのような歴史的背景と関連して、親戚探しでは集落における血縁、地縁、親睦的ネットワークが見受けられた。

第三者との関係性であるが、沖縄ニューカレドニア友好協会の設立以前から設立以降に亘って、中心メンバーか否かにかかわらず、移民当事者以外の人間が多数かかわっている。それは沖縄の相互扶助的社会によるものだと思われるが、友好協会は言葉の問題の仲介、または沖縄とニューカレドニアの家族あるいは親戚の緩衝的な役割を果たしていると考えられる。

世界のウチナーンチュ大会について、一般的な県民の反応は好意的である。しかし、イベント会場から離れたところでは関心のない人も見受けられた。第４回世界のウチナーンチュ大会と第５回世界のウチナーンチュ大会を比較すると、公式行事の開催場所が変わり収容可能人数が増大したためか、海外からの参加者だけでなく大会が一般県民に公開されたことが大きい。全体的に式典色というより、イベント色が前面に出て、移民世代の交代を読みとって、大会の企画、運営に反映されていると考えられる。

事例では筆者が何度か「世界のウチナーンチュ」と間違えられている。それは民族衣装や参加者パスという指標によるものだった。そもそもは「ウチナーンチュ」はハワイの移民社会で「ナイチ」と「ウチナーンチュ」と二項対立的に使われており、歴史的な背景によるものだとされる。世界のウチナーンチュ大会開催に至った背景においても、そのことが語られている。

現在は「沖縄県人」という意味で使われているが、抽象的な概念である。だからこそ大会運営のいきすぎによって、集団としての団結と排他を生み出しかねない。

しかしながら、世界のウチナーンチュ大会の「今」に目を転じたとき、参加者は沖縄系移民だけではない。これらのことは大会が変遷していることの表れであるといえる。